



もうひとつの太平洋戦争

朝鮮人慰安婦が告発する

私たちの肉体を 弄んだ日本軍の狼色と破廉恥

「聖戦」遂行のために「処女供出」という名の強制連行で、数十万に及ぶ朝鮮人慰安婦が、日本軍の性処理の道具とされていた。筆舌に尽くしがたい屈辱を抱えて戦中戦後を生きのびた彼女らが、重い口を開いて訴える。



白杵敬子

(ジャーナリスト)

「従軍慰安婦なるものにつきましては、古い人の話なども総合して聞きますと、やはり民間の業者がそうした方々を軍とともに連れ歩いているとか、そういうふうな状況のようでございます(以下略)」

一九〇六年六月、衆議院軍事委員会で「多数の朝鮮人女性が従軍慰安婦という形で強制連行されたという事実があるが、そのとおりか?」という社会党の本岡昭次議員の質問に対し、清水博雄政府委員はその事実、そして軍当局の関与を真向から否定した。

この政府答弁に怒ったのは、韓国の女性市民団体及び「太平洋戦争犠牲者遺族会」である。

三十六におよぶ韓国の女性団体は「女子挺身隊問題対策協議会」を結成、連名で当時の海部俊樹首相に以下の六項目からなる公開書簡を送った。

- ① 日本政府は朝鮮人女性たちを従軍慰安婦として強制連行した事実を認めること。
- ② そのことについて公式に謝罪すること。
- ③ 連行のすべてを自ら明らかにすること。
- ④ 犠牲となった人たちのために慰霊碑を建立すること。
- ⑤ 生存者や遺族たちに補償をすること。

④ こうした過ちを再び繰り返さないために歴史教育のなかでこの事実を語り続けること。

こうした韓国の女性団体の要請に対し、日本政府は次のような答弁を繰り返すばかりだ。

「労働省を中心に調査をしたが資料もなく、当時の関係者に聞いてみただけで、政府機関は関与していなかった……」

日常化していた女子挺身隊狩り

女子挺身隊と呼ばれた女たちがいた。太平洋戦争下、「聖戦」を勝ち抜くために軍需工場や病院などに動員された十二歳から二十五歳未満の未婚女性を日本では「女子挺身隊」と呼んでいる。

しかし、海を隔てた朝鮮半島では「女子挺身隊」という言葉は今も昔も別の意味で受け取られている。韓国の歴史家で日本の植民地政策を研究していた故・林鍾国さんによれば挺身隊として連行された女性のうち、慰安婦とされたのは約八〇パーセント。残りが日本同様の工場動員であったという。

「女子挺身隊」は「戦地の部隊に随行して将兵を慰安した女」と韓国の『広辞苑』に該当する辞典は記している。

軍隊慰安所の始まりは一九三二年上海事件にさかのぼる。当時上海派遣軍副参謀岡村寧次中将の資料によれば、岡村中将が海軍に做って長崎県知事に要請し、慰安婦団体を招いた。当初の慰安婦たちは、国内の売春経験者から志願の形で集められた。後の岡村中将の記録には「かく申す私は、恥ずかしながら慰安婦案の創設者である。慰安婦団を招き、その後まったく強姦罪がやんだので喜んだものである」とある。

しかし、戦線が南方へと拡大してゆくにつ

れ、圧倒的にその数が不足。しかも売春経験者には性病を持つ者が多く、当時植民地で、儒教による貞操観念の強い朝鮮半島のごく一般の婦女子に白羽の矢があてられることになった。

ここに日本軍と密接な関わりのある軍隊慰安婦の存在と当時の日本人の行動を裏付けるいくつかの朝鮮人、日本人による証換、証言がある。まず最初にあげるのは、召集軍医として上海からラハウルまで従軍慰安婦と行動を共にした産婦人科医麻生徹男が記した私家版の回顧録「戦線女人考」である。この中に麻生は多くの慰安所写真とともに「花柳病(筆者注・淋病や梅毒などの性病)の積極的予防法」と題する軍への報告書載せている。

「昭和十三年一月、上海において奥地へ進出する娼婦の検閲を命令によりおこなたり。この時の被検者は朝鮮人八十名、内地人二十余名にして、朝鮮人のうち花柳病の疑いある者は極めて少数なりしも、内地人の大部分は(中略)既に売淫経験を数年経験来し者の多さと興味ある対照を為せり(中略)。花柳病の烙印をおされし、アバズレ女の類は敢えて一考を与えたり。これ自軍將兵への贈り物と

して、裏にいかかわしき物なればなり。そして「軍用特殊慰安所は享樂の場所に非ずして衛生的なる共同便所ゆえ……」(傍線・筆者)

一九四一年七月、七十万名、三十四個師団が満洲に集結したおり、広報参謀原善四郎少佐は二万人の慰安婦徴募を担当したという。このときの慰安婦の集め方は、いわゆる「官斡旋」方式だったと伝えられている。朝鮮総督府が命令し、郡庁、面事務所、区長と命令が下り、警察力をもって女子愛国奉仕団体を徴用する——しかし、実態は強制連行に近いものだった。一九四二年から敗戦までの約三年間、山口県労務報国会の動員部長として朝鮮に渡った吉田清治は数千人の朝鮮人を強制連行した。そのうちの千人は女性だったという。彼は慰安婦狩りについて回顧する。

「徴用業務命令が軍からおりると、まず動員場所に決まった現地警察に連絡。二、三日後に十数名の動員部隊が現地に乗り込み、道警署で狩りだしの詳細な打ち合わせをします。狩りだし当日は早朝から集落を包囲、道路も封鎖して逃げないようにし、朝鮮人巡査を使って各家をまわり、女たちを呼び出すわけです。犬は吠え(女たちの・筆者注)泣き叫ぶ悲鳴で村はパニック状態。それでも慰安婦に

使えそうな女を選んで一カ所に集め、幌つきトラックに押し込むのですが、このとき最初のトラックに載せる女は手荒に扱うのがゴツでした。抵抗する女の両足をスルスル引きずり無理矢理トラックに詰めこむと、たいがい次からはおとなしくなり、泣き叫びながらトラックの方に走っていくようになるんです。

結婚しようが関係ありません。命令書には既婚者も可。但し妊婦を除く、となっていましたから」

業務命令は西部軍によって発令されている。西部軍によって発令された業務命令はたとえば次のようになっていた。

- 一、皇軍慰問・朝鮮人女子挺身隊二百人。年齢十八歳以上三十歳未満。既婚者も可。但し妊婦を除く。
 - 一、身体強健なる者。医師の身体検査、特に性病の検診を行なうこと。
 - 一、期間一年。志願により更新することを得。
 - 一、給料、毎月三十円也。勤務地、中支方面。動員地区全羅南道済州島。派遣日時、昭和十八年五月三十一日正午。集合場所、西部軍第七四部隊内。
- 狩り集めた朝鮮人女性たちは下関の野戦主

砲七四部隊の営庭で西部軍に引き渡す。女たちの行き先は軍事機密とされていた。

朝鮮に正式の女子挺身勤務命令が出されたのは敗戦一年前の八月だった。しかし、このころには挺身隊名目の慰安婦狩りはすでに日常化していたと言える。慶尚北道英陽郡の李玉寿さん(六十三歳)は女子挺身隊狩りのときの恐怖を次のように語っている。

「田舎では『処女供出』と呼んで、みんな怖がっていました。夕方、突然に巡査が来て『処女供出』しろと命じます。母は私を台所の裏に隠し、娘はいないと言い張って『処女供出』をかわらうじて免れました」

また李さんの隣りに住む李明植さん(五十三歳)の姉は一九四四年三月ごろ、朝御飯を食べているときに突然やってきた面書記と日本人三人によって日本に連行されたという。まだ十六歳だった。母親が泣いてとりすがったが無駄だった。

千三百人の慰安婦をひきつれて

一九四二年七月、上海から一隻の船が南方にむけて出港した。アトラス号——大阪の商船である。このアトラス号には千三百名の軍隊慰安婦が乗っていた。うち八割は朝鮮人女

性だった。

井上菊夫(八十二歳)も乗船客の一人だった。当時、上海で旅館を営業していた井上は南方ブームに乗じ、自分も一旗あげようと十二人の朝鮮人慰安婦を連れての南方行きだった。井上はその動機を語る。

「上海にあつたうちのような二流旅館は慰安所の様主たちによく使われたんです。彼らの話を聞いていると、中国では慰安所が成功しているという。南京や上海の慰安所経営者がこぞって南方に行くことになったんです。私も南京の慰安所様主から勧められましたね。ビルマあたりでは兵隊が現地の女性に乱暴して大変だったようです。慰安所を開設せんと問題が起きてしょうがないでしょう」

南方行きの慰安所経営者の募集、選定には、南京の支那派遣軍副官部があつた。一攫千金に争かろうと中国各地から様主たちが集まってきた。軍によって選ばれた様主たちは、出発前に支那派遣軍に呼ばれた。

「南方派遣軍総司令部の要請により、支那派遣軍これ(注・慰安所)を幹旋し……」

井上は今でも高級副官が読み上げた内容を語っている。南京から上海までは特別に仕立てられた慰安婦列車に乗り、前出のアトラ

ス号に乗船したのだという。

井上はビルマ(現ミャンマー)駐屯の菊部隊についてラングーン(現ヤンゴン)を経由してタウンギーに「第二ふるさと楼」という慰安所を開業した。ラングーンまでの船には約三百人の慰安婦が乗っていたという。

慰安所の建物は軍によって割り当てられる。井上に割り当てられたのは養門の立派なフランス風の民家だった。四畳半から六畳の部屋が十数室あり、十二名の朝鮮人慰安婦をそれぞれの部屋に配置した。

営業は九月初め頃に開始。朝八時から午後三時までが一般兵士、夕方五時から七時までが下士官、それ以降は将校タイムと時間割りが決められていた。料金は一回のセックスが

一円二十銭、一時間五円、泊まりは二十円。井上の記憶では、月に一番売り上げの多い娘で百二十円。平均七十円くらいの稼ぎがあったという。南方は女たちにとっても他の慰安所よりは稼げる場所といえたかもしれない。早ければ一年で三十円の借金が返せた娘もいたという。

しかし、一日十五人から二十人のお客をとる生活に変わりはない。

「うちの娘たちはみんな日本語がうまくてね、日本人の慰安婦よりも情の厚い娘ばかりでした。まあ、南方に来る前からすでに慰安婦をやっていた娘ばかりです。だから騙されたかどうかは知らないけれども、みんな納得していたと思います」

井上の経営する「第二ふるさと楼」はタウンギーで半年営業した後、菊部隊の移動にもない、メイミョーに移る。

* * *

慰安所を経営する井上の目には「納得して」と映る慰安婦稼業であつたが、当の朝鮮人慰安婦たちにとってはどうなのだろうか。

儒教の伝統が強い多くの慰安婦の故郷韓国からは、その生存が確認されているにもかかわらず、彼女たちの切なる証言を聞くことが

できずにいた。しかし、今年、韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会や女性市民団体の熱心な勧めもあって、ようやく三人の韓国元慰安婦たちが重い口を開いて語り始めた。

「カネザワ」と呼ばれた地獄の日々

●林孝子(仮名・六十九歳)の証言

実家は自作農でしたが、生活はとても貧しいものでした。一九四三年春ごろ、私が十七歳のときに徴用通知が家に届きました。このままでは日本軍によってどこかに強制連行されると毎日が不安でした。ある日豪き晴らしに釜山の影島橋にある三中井百貨店にエレベーターができたというので見物にかけたのです。帰りに釜山駅の近くの路地で二人の男性に声をかけられました。日本の倉敷にある軍需工場に出稼きに行けば、金儲けができると誘うのです。どうせ家に帰っても日本軍に徴用されるだけです、決心がつかかねます。男は半強制的に私の手を引っ張り、近くの事務所に連れていきました。契約とはいっても実に簡単でした。書類ができるとそのまま埠頭に連れていかれたのです。

船に乗り、すぐに後悔しました。船の中には数百人の朝鮮人の男性と百人あまりの女性



慰安所の各室の入口扉の上には番号と源氏名が記され、洗面場が各室にあり

が乗っています。女性たちのなかでも三人は、私のように道端で拉致されるように連行された者で、残りは徴用令状を受け取っていたようです。「帰りたい」と言うので、そのときから自由を奪われました。

最初に着いたのは広島でした。埠頭近くの施設に収容され、数日後、輸送船に乗り換えました。乗り換えのとき、見事に桜が満開だったことを覚えています。長い時間船にゆられながら、ひどい船酔いと悲しさで私はただ泣いてばかりいました。

着いたところはラバウルです。同じ歳の朝鮮人女性二人と一緒にしました。最初に連れていかれたのは野戦病院です。野戦病院には朝鮮女性六人と、中国女性、原住民など十人あまりが働いていました。

一緒にの船で来たイムさんは、五カ月くらいすると暑さのために死んでしまったようです。

病院では包帯や布団などの洗濯をしました。六、七カ月過ぎたある日、集合命令が下り、別の場所に移動する、と申し渡されました。

日本軍の引率で半日歩き、ある人里離れた密林の中に建っている原住民の教会に連れていかれたのです。私のほかにチョンチュン

ジャ、アという姓の二人の女性がいました。

教会の中は、畳二畳半の大きさに板で仕切られ、それぞれの部屋の前には女性の写真が掲げられていました。礼拝堂を改造した慰安所だったのです。白人、黒人、中国人もいて、朝鮮女性は私も入れて三人でした。私はそこで「カネツク」と呼ばれました。最初、軍人は部屋の中での様子を私に見せ、「お前も同じようにやれ」と言うのです。私は「嫌だ」と言いました。そうすると殴ります。ついに私は部屋に閉じ込められてしまいました。

日本の軍人たちは朝からトラックに乗って押し寄せ、多いときにはトラック五、六台できたのです。私は毛布一枚を敷いた部屋で一日平均十人の相手をし、多いときには十五人を超えました。部屋の前で軍人たちが列をつくって待っていて、前の人が終わると順番に入ってきます。軍人同士で順番を争うこともありました。ある日本人は「薬代にしろ」とお金をくれたこともあります。

「こと」の最中でも、空襲がくれば中断して兵隊と一緒に塹壕やトラックに逃げ込むことはしょっちゅうでした。

毎日が地獄のようで、私は性病予防と避妊のためにキニーネという黄色い丸薬を毎月与

えられ、飲まされたのです。米軍の空襲がひどくなってもこの薬だけは毎日与えられました。

夕方には軍人たちもあまり来ません。一緒にいた朝鮮人女性たちと集まって遊ぶこともありました。でも集まれば泣いてばかりいたようにも思います。夢をみても故郷、父、母の顔ばかりです。

私は死にたいと思い、川に行ったこともありましたが、そこにはワニがいて怖くなり結局死ねなかったです。

さつま芋一、二個が一日の食事のすべてという毎日がずいぶんと続きました。

ある日、一緒にいたチョンチュンジャの姿が突然見えなくなりました。後で聞いたら、彼女は性病に悩まされ、その辛さにチマをヤシの木にまきつけ、首を吊って自殺したのだといいます。

日本の軍人たちが急に姿を消しました。どうしたのかと不思議でしたが、彼らが来ないほうがいいので女たちだけで芋を植え、果物を食べながら自給生活をしていたのです。

何か月かが過ぎ、朝鮮の男が来て「はやく船に乗れ」と言いました。

私はまた騙されるのではないかと疑い、審

戒していましたが、帰国船だといえます。

「船に乗らなければ皆死ぬ」と言われ、乗ることにしました。彼らが来なければ私は解放も知らず、今でもラバウルで生活していたのではないかと思います。帰国船に乗って釜山港に帰ったのは解放の翌年の四月でした。

お前たちは死んでもよろしい

金麗子(仮名・六十九歳)の証言

私は全羅北道益山郡の貧しい小作の長女として生まれました。幼い頃から、私と弟を育てるため他人の家に日雇いに出掛け、その日暮らしのような生活をしていました。そのため私は学校に行ったこともなく、読み書きさえ教わったこともないので、いまでも不自由し

ています。

私が満十八歳になったころ、朝鮮人の男二名、一人は日本人かもしれませんが、家の前にいた私に声をかけてきました。「上海に行けば金儲けができる所があるから」とその場で私の手に三、四十円の金を握らせ、強引に誘ったのです。とても貪しかった私は、これで少しは両親を養にできる、と男たちについていくことを決めました。慌ただしく母に金を渡して、詳しい話もせず男たちにせかされるように家を後にしたのです。

郡内の旅館で一泊したあと、裡里近くの旅館に連れていかれました。大きな部屋に十、五人の朝鮮女性たちが集められており、彼女たちと一緒に列車に乗せられて、北へ向かったのです。

私たちは全員チマ・チョゴリ姿でした。上海近くの田舎の駅で下ろされ、案内してきた二人の男は、出迎えの二人の憲兵に私たちを預けました。憲兵は私たちを軍用トラックに乗せ、二時間ほど走り、日本軍部隊のある地域へと連れていったのです。

私たち女性は、軍隊から少し離れた軍用テントに収容されました。私のテント番号は一番で「カネツ」と呼ばれました。ほかの女た

ちのテントはバラバラで、十四、五名の女性たちがどのテントに入れられたのかはつきりわかりません。テントの広さは二、三畳で、床にはヨシズのようなものが敷いてあり、布団もなく(軍隊)毛布が一枚だけ与えられました。国防色のズボンが与えられ、軍人のような格好をさせられました。

最初、私はテントの中で何の仕事をするのかが分かりません。初めに軍人の相手をするように言われ、拒否すると、星二つの軍人(注・一等兵)にひどく殴られ、逃げることもできません。故郷を思い、泣き暮らすだけの毎日でした。

結局、私はそのテントで軍人の性の相手をしながら、四年近くをすごすことになってしまったのです。

朝八時ごろから兵隊はやってきて、昼間は下士官夜は将校が来て泊まっていきました。一日十人から十五人、五十人のときもあつたように思います。土曜、日曜は人数が多く、忙しかった。将校たちは避妊具使いますが、多くの一般兵士はサックを持っていません。

週に一回、軍医の性病チェックを受けます。いつも六〇六号という注射をされました。注射のせいか、若かったからか、そのとき性



ミイキーナで捕虜となった慰安婦たち

病にはかかりませんでした、年齢とともにそれが衰われ、いまは病気に悩んでいます。

三年がたったある日、ミヤザキという少尉が酒を飲んで私を呼びました。そのとき、私は客がいたので外に出られずにいると、少尉は「チクシヨー！ バカヤロー！」と叫びながら「お前たち（朝鮮人慰安婦）は死んでもよろしい！」と怒鳴って、軍刀を抜いて私の腰に切りつけたのです。さらに固い長靴のかかとでみぞおちを蹴り上げられ、私は死ぬほど暴行されました。軍刀で突かれた腰の骨は裂け、今も骨がグルグルと上下に動きます。蹴り上げられた腹は裂け、今もケロイド状の傷痕となって残っています。ミヤザキ少尉がそれほどの暴行をしても誰も助けてくれません。私は悔しくて泣きながら一人で傷を治療しなければなりませんでした。

私たち、騙された女たちを監督していたのは東京出身の年寄りの日本人でした。私たちは彼らを「お父さん、お母さん」と呼んでいました。でも彼らは私たちに一銭も払ってくれません。ただ日本の着物一枚を買ってくれたことがあっただけです。

食事は十時と四時の一日二回で、軍隊の食堂に行き、炊事係の兵隊が作るものを食べて

いました。食事は少ないご飯とたくあん、味噌汁など質素なもので、いつもお腹がすいていたことは忘れません。

逃げたいと何度も思いました。でも、付近に民家は一軒もありません。地理も不明で誰に頼っていいかわかりません。なによりも兵隊が怖くて逃げることはできなかつた。もう泣いてばかりの生活でした。

一九四五年八月十五日のことでしょうか、私にはハッキリわかりません。「平和がきた。皆出てこい」という声に、私が外に出るとトラック二台が停まっただけで乗り込み、私は陸路、故郷にむかっただけです。ほかの女たちがどうなったのかは知りません。トラック運転手は北の人で、攻撃を受けると車の下に隠れ、幌のついた荷台に乗って、なんとか故郷にたどりついたのでした。

家に帰ってみると、両親は私が突然いなくなり、気落ちしたためか、すでに死亡していました。やつと弟に会うことができました。

一日二十人以上の相手をして

金学順（六十七歳）の証言

私は、満洲吉林で生まれました。父は独立運動家を助ける愛国者でしたが、私が生まれ

と記憶しています。中国人の赤煉瓦の家を改造した家です。一九四〇年春ごろでした。

日本軍が占領したその集落には三百人ほどの日本兵が駐屯していました。トラックで夜着いた私たちは、将校に案内され、真っ暗な部屋に入れられ、外から鍵をかけられ閉じ込められたのです。そのとたん、私は「しまった」という後悔でいっぱいでしたが、もうどうしようもありません。

次の朝、馬のいななきで人々が生活しているのがわかり、室内から外をうかがうと隣りの部屋には三人の朝鮮人女性がいるのがわかりました。彼女たちは私たちに「なんで、こんなところに来た。馬鹿なことをして！」と怒りました。その理由はすぐにわかりました。将校が私を小さな部屋に連れて行き、服を脱げと命令したのです。

当時、私は十七歳。何も知りませんでした。そのときのことを考えるだけでも心臓が爆発しそうです。とにかく必死で逃げようと思いました。「嫌だ！」と叫ぶと、その日本兵は「この野郎！ 朝鮮人のくせに！」とものしり、私を殴り、足で蹴り上げ、暴力で犯したのです。

その部隊には五人の朝鮮人慰安婦がいまし

た。それぞれ簡単な板で仕切った部屋に押し込まれていました。「しずえ」は将校専門で、私たちは一般兵の相手をさせられました。多い日は一人で二十人以上の相手をし、私は肺病になってしまったのです。いまでもレントゲンでみればその痕があるはずで。

私たちは部隊が移動するたびについてまわりました。二、三回移動した記憶があります。逃げようにも周囲は日本軍の占領地域です。

前線に出撃する前の兵隊は暴力的で、慰勞のために無理に歌や踊りもやらされました。そのときに覚えた歌がこんな歌でした。

「諦めましょうと、別れてみたが——、
（無常の夢）で頭の部分を日本語で歌った）

一週間に一度、軍医が来て、私たちを検査します。私も「六〇六号」の注射を打たれた覚えがあります。救回めに移動したときのことで。銀錢売買をしていた同胞男性が部隊に立ち寄りました。私は必死に助けを求めました。そして彼に連れられ、地獄のような日本軍から脱出したのです。

彼の名は趙元禮といい、彼と二人で南京、蘇州、上海と日本軍の目をかすめながら所帯を持ったのです。上海のフランス租界で小さな質屋を営み、二十九歳までに子ども二人が

て百日後に死んだそうです。生活が苦しうために母は二歳になった私を連れて、生まれ故郷の平壤に帰り、親戚を頼ったのです。でも、母子二人の生活は相変わらず貧乏のどん底で、私は小学校四年までしかいっていません。母は家政婦、私は近所の子守をしながら細々と暮らしていたのですが、十四歳のとき、母が再婚したのです。私は新しい父を好きになれず、次第に母にも反発しはじめ、何度か家出もしました。その後平壤にあった妓生専門学校の経営者に四十円で売られ、養女として踊り、楽器などを徹底的に仕込まれたのです。

ところが、十七歳のとき、養父は「縁きに行くぞ」と、私と同僚の「エミ子」を連れて汽車に乗ったのです。着いたところは満洲のどこかの駅でした。サベルを下げた日本人将校二人と三人の部下が待っていて、やがて将校と養父との間で喧嘩が始まり「おかしいな」と思っていると養父は将校たちに刀で脅され、土下座させられたあと、どこかに連れ去られてしまったのです。

私とエミ子は、北京に連れて行かれ、そこからは軍用トラックで、着いたところが「北支のカッカ県テッベキチン」（鉄壁鎮）だった

生まれ、そのころが私の生涯でいちばん幸せな時代だったといえます。

虐殺を逃れて生きた次の戦後

一九四五年八月十五日、日本の敗戦の日である。朝鮮半島にとっては解放の日。軍隊慰安婦の苦しみは、しかし、この日をもって終わりにはならなかった。いや、ある人々にとっては、もっと悲惨な現実の波に襲われたと言ふべきかもしれない。

彼女たちの多くは日本軍の敗走の過程で飢えと衰弱で倒れた。また足手まといとして置き去りにされたり、「軍の恥」として虐殺されたケースもあったという。前出の井上衛夫は、すでに「第二ふるさと樓」を軍直屬の管理にゆだね、慰安所仕事にドリフトを打っていた。

菊部隊とともに行動していた十二人の朝鮮人慰安婦たちのその後は不明である。ただ、一九四四年九月に、菊部隊は扶正、騰越の闘いで玉砕したという事実だけが記録に残る。慰安婦たちのほとんどが自爆、もしくは殺されたというのが現在の通説となって伝わっている。あるフィリピン戦線の元日本軍兵士は「兵隊さん、水ください」と哀願しながら衰

東京 川崎駅前(銀座口)前 年中無休

入院設備有り

十七病院



茨谷 03(3770)2111
 銀座 03(3834)2111
 横浜 045(641)2111
 新潟 025(231)2111

COSMETIC SURGERY J. HOSPITAL

弱死してゆく女性たちを自撃している。

韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会の英陽軍支部長姜仁昌は自らも軍夫として徴発された沖縄でたくさんの朝鮮人慰安婦がムシロがけの粗末な慰安所に閉じ込められ、日本軍兵士の慰み者になっているのを自撃している。姜支部長のいた慶良間諸島・島では、一九四五年三月末米軍が上陸し、食料も底をついたなかで山中にたてこもった日本軍は、敗戦までの五カ月間、朝鮮人軍夫が米軍に通報したり脱出を防ぐために、三十歳くらいまでの島民を義勇軍として組織し、朝鮮人軍夫たちの監視にあたらせた。朝鮮人軍夫たちには食料を配給せず、さらに畑の作物をとった者は重刑に処す、とした。ひどい飢饉のなか、畑の芋を食べた朝鮮人軍夫十二名が銃殺され、約五十名が地下壕に監禁された。姜らは危うく

米軍捕虜となって難を逃れたが、慰安婦たちの行方は定かではない。

「いったい何人の慰安婦たちが生き残れたのか想像できません。おそらく多くが死んだり殺されたりしたでしょう。当時、日本人は朝鮮人を人間として扱わなかったのですから」
 かつて祖国に迎りつた慰安婦たちを待っていたのはとりかえしのつかない過去を背負ったさらなる人生の苦渋だった。

儒教倫理の強い国柄ゆえ、たとえ強制的であつたにせよ日本人の慰安婦であつた過去は隠しおさなければならない。朴末子は食堂の手伝いをしながら金をため、ソウルに上京する。ソウルの市場で身体を酷使し、限界まで働いた。しかし、再発した性病を夫に隠さなければならない。稼いだ金は治療費にすべて消えていってしまった。自殺も何度か試み

ている。布団をかぶって、水銀をよもぎに乗せて煙を吸うという「薬」も何度かやってみた。病気を直したい一心の努力だった。それが自殺にも等しい行為で、何度か自殺も試したが死ねなかった。

金順子の両親は彼女の留守中に亡くなっていったという。残された親族である弟にはもちろん慰安婦である過去を隠し、二十五歳で最初の夫と結婚。しかし、子どもはできなかった。ただ一人実名で涙ながらに過去を語った金孝順の戦後も茨の道だった。

「一九四六年夏、私たち夫婦は子ども二人を連れて光復軍の最後の船で仁川に上陸しました。ところがソウルの難民収容所で四歳の娘が死んでしまったのです。私は残された長男の成長だけを生きがい、夫とともに東大門市場で懸命に働きました。でも、朝鮮戦争末

(280)

期、商売で軍隊に出入りしていた夫は爆発事故に遭い、死んでしまいました。さらに残された息子も、小学校三年生のときに親子二人ででかけた行商先の湖で溺れ死んでしまったんです。

私は運のない女です。それ以来全国を流れながら、酒を飲み、煙草を吸い、自虐的な毎日を過ごし、息子の後を追って死ぬことばかり考えていました。そのうち、私は夫が酒を飲んで酔っぱらい、いつも私の過去を責め、そんな女を助けてやっとなじりつづけてきた私の不幸の根元を思い知ったのです。

老いを迎えた軍隊慰安婦たち。彼女たちの現在を知らうとソウルの金孝順の家を訪ねた。ソウルの下町、低い煉瓦屋根の長屋が並び一人一人がやっと通れるとある路地裏に金の家はあった。一軒に三部屋はあるものの、二部屋には別の人が住んでいる。二層くらいの暗く小さな、ほとんど家具の何もない部屋に静かに座っていた。土間に魚が干してあった。

彼女の収入は生活保護の月三万ウォンと十キロの米だけ。この生活は他の二人にしても同じだ。日本に比べ物価の安いソウルとはいっても、ここ数年のインフレは凄まじい。とても満足なゆく暮らしはできない。

* * *

十二月六日、あらゆるマスコミが真珠湾五十周年記念を報じていた。彼女たち三人の軍隊慰安婦や韓国人の元日本軍人・軍属ら三十五名の韓国・太平洋戦争犠牲者遺族会は、東京地方裁判所に、戦後放置され続けた韓国人に対する戦争処理の精算請求の訴えを提出した。第二次世界大戦中、日本の植民地にあつた無数の朝鮮人、台湾人が日本人として強制的に徴用され、ある者は戦犯として裁かれた。しかし、軍人恩給もふくめてあらゆる個人に対する戦後補償は、彼らを除外し続けてきた。戦争中は、皇国臣民として、天皇の赤子として無理矢理狩り出し、戦後は一方的に日本政府は外国人扱いにしたのだ。補償どころか、戦後日本政府は、狩り出された朝鮮人軍人・軍属の生死確認・遺骨収集・返還など基本的戦後処理すら放置したままだ。

かつてニュルンベルク裁判はドイツ人によるポーランド人の強制連行は「人道に対する罪」と断罪した。この十月、ドイツ政府はポーランド人強制連行労働者を個別に補償するために約四百億円の補償基金設立を決定した。アメリカも日米人を強制収容した罪を認め、収容された日米人個人々々に対する補償を

決定し、実行に移されている。しかし、とりわけ日韓の戦後賠償は六五年協定の一括五億ドルで決着済みという姿勢を日本政府はとりつづけている。今のところ韓国政府も静観している。しかし、国同士の決着がどうあれ、一人一人の個人に対する「人道に対する罪」については何も決着がついてはいない。国家を大義とする「聖戦」は無数の個人の人生をこれだけ長きにわたって根こそぎ破壊してきたというのに――。

今、日本の国際貢献が論じられているが、その前に韓国・北朝鮮をはじめ、中国やアジアの人々に対する戦後処理をきちんとすべき時といえるだろう。

* * *

金孝順は発言する。
 「私にはもう何も無い。お金もいらぬ。ただ十七歳の私にもどしてほしい」

冒頭の政府答弁はいったい何を根拠にして語られているのか。なかったこととして忘れられてはならない。金孝順らは、裏に服するときに女たちがまとう純白のチマ・チョゴリをまもって地獄の中に消えていった。

(写真提供/麻生徹男・池宮商会出版部・文中一部敬称略)

(281)